際会議」参加の真の姿を如実に伝えている。

表紙カバーの京都大学時計台の姿絵は、著者が心から京大を愛し青春を想い、いつくしみの心をもっていつまでも見つめている御気持が伝わってくる。また近影の温容からは暖かな御心ばえが感じられる。

本書の特色は、著者の抜群の該博・正確な記憶力と記録の整備、社会動向に対する適確な透視力、何物にもおもねない積年の強靱な意志力と、何よりも人を愛する心に支えられた暖かみに包まれたものであることである。また澱みのない流暢な筆力によって構築されている。「近現代史書」でもあり、今後に活躍する青年世代には是非とも座右に備え味読していただきたい書であることを強調しておきたい。

なお「壮年篇」の出版を期待し、著者のさらなるご健勝を祈るものである。

（末中　哲夫）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、二〇〇四年九月一日、三七四頁、A五判、定価二九四〇円〕

編集後記

多事多難であったこの一年も、ようやく終わろうとしています。本学会にとって、本年の最大の事件は、学会誌の刊行などを依頼していた学会事務センターの破産である。▼前号の編集後記で、本学会への影響などをお伝えしたが、その際に、学会事務センターに預けていた四一万円ほどの預かり金が返還不能となる見通しとお伝えした。その後この預かり金は、未払いであった医史学雑誌の本年第二号の出版費用と相殺されることになり、学会の実質的な被害はなくなることになった。不幸中の幸いである。▼多事多難は、学会だけのことではない。国立大学は独立行政法人となり、大学病院は研修医の必修化にさらされ、医療情報の公開など医療の場も厳しさを増している。来年の医史学会総会（六月二五～二六日）では、学術会議との合同シンポジウム「人をみる医師を育てる――医学史・医哲学を現代の医学教育に生かす」が開催される。医史学を若い人たちに伝える試みとして、多くの会員の方たちの来場を期待しています。▼多事多難の中で、医史学雑誌も本年の最終号の発行にまでこぎ着けた。原著論文三編、研究ノート一編、資料三編を掲載することができた。しかし原稿の投稿中が少なく、第四号の内容を決めた一〇月二二日の編集会議の時点で、審査中の原稿の在庫がなくなってしまった。会員のみなさんからの積極的な投稿を、重ねてお願いします。

（坂井　建雄）